

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<書評> 唐橋君山纂輯・太田由佳訳・松田清注『訓読 豊後国志』（思文閣出版、2018年）

著者	小二田 章
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	19
ページ	399-401
発行年	2019-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001262/



書評

唐橋君山纂輯・太田由佳訳・松田清注『訓読 豊後国志』（思文閣出版、2018年）

Kunzan Karahashi, Yuka Ota, Kiyoshi Matsuda “Kundoku Bungokokushi”

小二田 章

KONITA, Akira

本稿は、文化元年（1804）成立の地誌『豊後国志』（唐橋君山¹⁾纂輯、田能村竹田・伊藤鏡河・古田寛斎校、抄本）の訳注書に対する書評である。該書は、江戸期に編纂された地誌を漢文訓読にて読み下して注釈を施し最後に研究者の解説をつけたものであり、研究書ではない。しかし、注釈と解説の要素には研究の要素が含まれている。原文に限って言えば、地元先賢賞揚目的で、昭和六年（1931）に同書の訓点本²⁾が出版されている。該書を現在出版する理由には、明らかに研究的関心（特に地方史研究に対する研究蓄積）も含まれる。これまで近世地誌の翻刻・再刊は多く行われてきたが、大半は記念的関心に基づくもので、歴史的研究の視座は無かった。該書の書評を行う最大の意義は、研究成果に基づく編纂に対する関心がある初めての地誌翻刻・再刊であり、近世東アジア「地方史誌」³⁾研究に至るために重要な刊行と位置付けられることである。

1. 書物内容と要点紹介

まず、書物の概要を述べる。巻頭に竹田市長・首藤勝次氏の「ごあいさつ」と目次・凡例が置かれ、刊行の意義づけと全体の枠組みを示す。その上で、本体の『豊後国志』が置かれ、古屋昔陽「序」・唐橋君山と伊藤鏡河・田能村竹田による「凡例」・「目録」と「巻之一」～「巻之九」の本文、跋にあたる伊藤鏡河・田能村竹田「上書」が述べられる。そして、太田由佳「『豊後国志』の内容及び特色」、松田清「『豊後国志』覚書」、佐藤晃洋「唐橋君山と岡藩における『豊後国志』編纂事業」の三篇の解説が示され、最後に松田清「あとがき」を附して結ぶ。

本書の刊行背景は、「ごあいさつ」「あとがき」に示された、旧豊後岡藩藩主の末裔であった故中川久定氏（京都大学名誉教授、フランス文学・思想）による「竹田市総合地域学研究センター 由学館」の設立・活動と結び付き、地域先賢研究の側面と京都大学関係者中心の研究作業の側面が併存している。

『豊後国志』の本体の内容については、参考のための表を示した⁴⁾。概要と特徴を述べると、巻別には、最初に豊後国全体の総説を掲げ、その後各巻で個々の郡について述べている。巻内の内容を見ても、巻一の豊後国全体の項目と、巻之二以降の郡志の項目では、項目名と内容に差異が生じている。差異の背景には、もともとが中国の地方志（特に総志である『大明一統志』）を参照して作成したため、中国の府・州に該当する豊後国と縣・鎮あるいはその中の小項目に該当する各郡の間で、使用するカテゴリを区別して記載したことが考えられる。

そして、「解説」について概要を述べる。太田由佳「『豊後国志』の内容及び特色」は、まず「一 構成と内容」にて、『豊後国志』の各項目ごとの概要を述べ、その特徴を概観する。次に、「二 特色」では、『豊後国志』の特色について、「（1）漢文（2）復古的（3）一国志」の三点に集約している。（1）では、『豊後国志』（とその参照した享保十九年（1734）成立の並河政所『五畿内志』）の前提が『大明一統志』にあることを述べた上で、中国地誌に則った地誌作成は、自国の文運・歴史が中国に比する内実を持つことの確認ではないかと述べている。（2）では、前述『五畿内志』と共通する古代の記載と考証を重ん

キーワード：『豊後国志』、近世日本地誌、中国地方志、東アジア地方史誌、編纂

Key words : (Bungo Kokushi), Japanese topography in early modern, Chinese local gazetteer, East-asian local historiography, editing

附表『豊後国志』各別内容			参考『大明一統志』
巻別内容	巻別内容(掲載順)		
巻之一 (巻頭)	1. 地理		1. 地理
巻之二 (巻頭)	2. 風俗	一のみ	2. 風俗
巻之三 (巻頭)	3. 名産	一のみ	3. 名産
巻之四 (巻頭)	4. 人物	一のみ	4. 人物
巻之五 (巻頭)	5. 建築	一のみ	5. 建築
巻之六 (巻頭)	6. 宗教	一のみ	6. 宗教
巻之七 (巻頭)	7. 産業	一のみ	7. 産業
巻之八 (巻頭)	8. 交通	一のみ	8. 交通
巻之九 (巻頭)	9. 風物	一のみ	9. 風物
	10. 風物	一のみ	10. 風物
	11. 風物	一のみ	11. 風物
	12. 風物	一のみ	12. 風物
	13. 風物	一のみ	13. 風物
	14. 風物	一のみ	14. 風物
	15. 風物	一のみ	15. 風物
	16. 風物	一のみ	16. 風物
	17. 風物	一のみ	17. 風物
	18. 風物	一のみ	18. 風物
	19. 風物	一のみ	19. 風物
	20. 風物	一のみ	20. 風物
	21. 風物	一のみ	21. 風物
	22. 風物	一のみ	22. 風物
	23. 風物	一のみ	23. 風物
	24. 風物	一のみ	24. 風物

※ 巻内内容は太田由佳の解説p17『豊後国志』構成を参照した。

じる態度を取り上げ、時代の離れた並河政所との理想共有を指摘する。(3)では、『豊後国志』が藩領を越えた一国志であることの意義を述べ、前後の一国志を志向した地誌が藩領のみの記載にとどまったことを併せて述べる。「おわりに」では、「本書を十八世紀知識人が提示するひとつの地域像として受け止めるならば」どのような応答があるべきかと、近世本草学・思想文化を専門とする筆者の立場に引き付けた問題提起をして結びとする。

松田清『『豊後国志』覚書』は、まず該書の底本となった『豊後国志』中川家本を幕府に献上した正本に対し、岡藩藩校の由学館に置かれた副本と断じた上で、由来・書誌を述べる。次いで、編纂者の唐橋君山について、編纂来歴を墓表などの史料と比較した後、もうひとつの地誌編纂作業であった『箋釈豊後風土記』についても述べる。次に、編纂背景として、岡藩の儒教主義的風潮を君山も含めた「儒葬(墓)」から説き起こし、『豊後国志』内の儒教主義の影響を受けた項目について言及する。そして、地理的記載に対する西洋の地理書との関連を述べる。「おわりに」では、『豊後国志』が古学・儒教主義の下で生まれた時に、外国の脅威も勃興し始めたことを述べ、『豊後国志』と同時期に成立した志筑忠雄『鎖国論』との比較検討の意義を述べて結びとする。フランス文学を専門とする筆者の立場から、十九世紀日本の内と外をめぐる認識という、『豊後国志』の持つ重要な問題意識を指摘したものであろう。

佐藤見洋「唐橋君山と岡藩における『豊後国志』編纂事業」は、編纂者・唐橋君山の伝記的生涯を扱う。『豊後国志』の編纂において、唐橋君山が参照

した資料を細かく分析し、記載の形成過程における唐橋君山の考証と検討、及びその協力者たちの分担校訂の過程までを明らかにする。「むすびにかえて」では、『豊後国志』が後に編まれた『新編武蔵国風土記』などと編纂形式が異なり、一時代を画する地誌であったことを指摘する。筆者は、『豊後国志』に関する唯一の専論発表者⁵⁾であり、該解説は専論2篇を節略した内容を投稿したものである。

2. 書物の成り立ち：書物成立とその背景

該書の意義書物成立とその背景、及び編纂者である唐橋君山に即して考える⁶⁾。『豊後国志』は、藩医として豊後岡藩に召し抱えられた唐橋君山(君山は号。名は世済、江戸の人)が、寛政十年(1798)七月から藩の支持のもと編纂を開始した「一国志」である。藩領を越えた地誌であり、その背景には、岡藩藩主・中川家と血縁関係にあった幕府老中・松平信明が、唐橋君山の師のひとりである林述斎を中心に遂行した幕府の全国誌編纂計画の前駆としての意味づけがあったとされる。そのため、幕領にも幕府から協力が要請されるなど、藩を越えた国家的関心を含む官撰地誌として編まれていた。寛政十二年(1800)十一月に唐橋君山が病没した後は、田能村竹田・伊藤鏡河が中心となって整理・校訂を行い、田能村竹田が2年間江戸に出張して松平信明・林述斎らと交渉及び編纂方法の指導を受け、享和三年(1803)に浄書を行い、翌年の八月に幕府に上納し、編纂活動は完了した。

書物成立と背景の注目点として、まず幕府も関与する国家的官撰地誌の側面が挙げられる。江戸幕府成立後、武家の領地支配の実質的・象徴的工具として、中国の地方志(特に『大明一統志』)に範をとった地誌編纂を幕府が(林家を媒介に)推奨しており、幕府は最終的に各地地誌を集積して全国誌を編纂することを目指していた。その一端の試みが、前述の並河政所『五畿内志』、享和三年(1803)に出された地誌編纂の内命と林述斎らが進めた全国誌編纂計画などである。各藩そして江戸幕府が同様の統治権威確立を図って地誌編纂の伝統を組み上げたとも言える。

また、編纂が藩の漢学者によって行われたことも挙げられる。『豊後国志』では唐橋君山を中心とす

る漢学者ネットワークの活用によって編纂の便が図られているが、当時の漢学者たちに地誌編纂の意義やその形式が共有されていたことを示している。当時の藩は地方志の収集を行っており、漢学者は地方志の意義と日本に移植する利害を理解していたのである。漢文（真名）で書かれた地誌が志向され、漢文資料の記録や儒教関連の儀礼が明記され、平安期の和歌が万葉仮名表記にて記載される、という『豊後国志』の特徴が生まれてくると言える。

そして、この漢文『豊後国志』は、老中・松平信明からの要請で仮名交じり文での完成を目指したものの、最終的に漢文にての完成となった点に注意したい。前述の幕府の地誌編纂の内命以降、幕府は仮名交じり文を基本的に要請するようになり、形式もそれまでの中国地方志（『大明一統志』）に拠った項目から村落単位に及ぶデータ記載など、日本の独自形式を志向していく。中国的形式の地誌の最後のひとつであり、言い換えれば日本における「地方志」の完成形態のひとつであると言えよう。

3. 刊行の意義と批評

現在該書を刊行したことの意義について該書に対する批評も含めて述べたい。まず、該書は訳注の結果、現代日本語において理解できる近世日本地誌であることが挙げられる。地域の先賢を顕彰する目的の近世日本地誌の翻刻は多くなされてきたが、それは漢文に訓点を打つにとどまり、読者の漢文・古典理解の素養及び地域知識に依存するものであった。該書は一歩進み、現代日本語にて『豊後国志』を提示した。それは日本史・日本文学の研究者の手から、それ以外の研究者・関心を持つ人々に『豊後国志』を開く結果になったと言えよう。『豊後国志』の形式理解やいくつかの訳注に違和感が残るとはいえ、再検討され確認される可能性をも開いたと言える。

次に、前述の解説に見られる編纂の史的理解に向けた認識が挙げられる。日本近世地誌に対する研究関心は、地理学上の「地誌」というカテゴリづけにて進められ、史的理解・編纂過程に対する関心は、近年まで僅かであった。白井哲哉氏以降、日本近世地誌を史的に位置づけ、編纂過程を考えるという研究潮流が徐々に一般化しつつあり、該書の解説はそれを踏まえ、『豊後国志』と関連の研究動向をまとめ、

史的位置づけを明らかにすることを試みている。

一方で、該書全体の問題として、日本史及び地域史の視座にとどまっていることが挙げられる。中国にて12世紀以降、編纂を積み重ねてきた地方志が、16-17世紀を境に東アジア全域に流入し、各地にそれぞれの「地方史誌」の伝統を作り上げる、という過程が近年注目され始めた⁷⁾。各地の「地方史誌」は、概ね中国の地方志の模倣から徐々に独自化する傾向があり、『豊後国志』は、まさに日本の「地方史誌」の伝統形成を考える上で、重要な鍵となるものである。前述の形式理解など要素の検討を通じて大きな視座に結び付け、史的位置づけをより万全なものにするのではないかな。

むすびに代えて

該書は地域称揚から発した近世日本地誌の訳注書であるが、編集者の意図を越えて、より広い範囲の人々に開かれて意義を持った。不足している内容も、今後さまざまな研究者の手を通して、より豊かな成果に繋がって行くのではないかな。その可能性のためにも、該書の一読をお勧めしたい。

注

- 1) 江戸期の漢学者は該書に倣い号にて表記する。
- 2) 『豊後国志』（二豊文献刊行会、1931）
- 3) 「地方史誌」とは歴史的記載を中心にした地域に関する総合的書物を指す。地理学的要素を中心とした「地理書」「地誌」等の概念と区別するために用いるものである。斎藤博・来新夏編『日中地方史誌の比較研究』（学文社、1995）を参照。
- 4) 具体的な内容は、該書の解説・太田由佳「『豊後国志』の内容及び特色」を参照。
- 5) 佐藤晃洋「唐橋世済と『豊後国志』編纂」（『史料館研究紀要（大分県立先哲史料館）』1号、1996）、同「『豊後国志』編纂における史料考証」（『史料館研究紀要』19号、2015）。
- 6) 以下の文献を参照した。注5前掲の佐藤論文、白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』（思文閣出版、2004）第5章第2節、同「編纂と工程の活動」（重田正夫・白井哲哉編『『新編武蔵風土記稿』を読む』、さきたま出版会、2015）。
- 7) 評者は「地方史誌」の議論基礎を作るべく、シンポジウム「東アジアの一統志」（於早稲田大学、2019年7月28日）を主催した。